

## 「WSC事業顛記」

(インドネシア・バリ水不足地域での水槽タンク設置)

国際ロータリー第2640地区IM1組

ガバナー補佐 村上 有司 (田辺ロータリークラブ)



1. 2640地区では、昨年度の“タイ国WCS海外視察”に続き、今年度はインドネシア・バリ島へ120人余の大視察団を派遣し、第2回目の“WCS海外視察”を行った。私達田辺ロータリークラブ会員・家族・友人ら17名の有志は、昨年に続き参加したが、今年は昨年とは違い、他クラブの“WCS事業”を視察するという単純なものではなく、私達自身が手掛けたWCS事業の進捗状況を直接把握するという重要な任務があった。

2. 私は、2640地区1・M1組の内、田辺・田辺東・田辺はまゆう・白浜の4ロータリークラブのガバナー補佐をおおせつかっている。2006年9月、三軒ガバナーの公式訪問に同行した際、「各クラブ毎にWCS事業を行うことは少人数クラブでは難しい。4クラブが合同でWCS事業を行いたい」と申し上げたところ、ガバナーは即座に賛同され、「是非共よろしく御願います」と話された。私には、具体的計画があった訳ではなかったが、言い出した以上後に引けなくなり、4クラブ会長らに、合同WCS事業について検討してもらうことにした。

一方、地区WCS委員会(京谷知明委員長)に対し、事の仔細を連絡し候補事業を上げてもらうよう依頼した。最初はモンゴル・ウランバートル近くのゲル(テント村)に、水槽タンクを寄付する計画を検討したが、遠距離であることに加え、「モンゴル出身の相撲取りが、日本で大金を稼いでいるのだから、更にWCSを実行しなくともよい」と、多少へソ曲りな考えが出て中止となった。

3. その後も試行錯誤を繰り返していたところ、インドネシア・バリ島の北部で水不足で大変苦勞をしている人々がいることを知った。バリ島といえば、観光のメッカとして世界中から多くのリゾート客が集う場所との認識であったから、その情報には驚きと同時に新鮮さを感じた。更に調査を進めてみると、リゾート客で賑わう地域は全島の3分の1弱で、それ以外の多くの地域は水不足に悩まされていることが判った。水不足地域の中にも温度差があり、①水源地に比較的近い所はパイプを敷設して直接集水することが出来る。②水源地から遠いが道路が整備されている所は、タンクローリーで水を補給することが出来る。③これらいずれの条件にも当たらない地域が最悪であり、水源地迄バケツを頭にのせて徒歩で出掛け持ち帰るしか方法がない。ここでは、子供達も生活の水を得るために駆り出され、勉学どころではないことを知った。

地元タマンロータリークラブは、この最悪の地に雨水を貯える水槽タンク(4m×4m×5m)を寄付する

運動を続けているが、資金に限りがあり需要に応えられない状況で、国境を越えてロータリアンの支援を求めている。2006年12月末迄、地区WCS委員会で取り寄せてくれた多くの資料の検討が続けられたが、本年度の“WCS視察”先がインドネシア・バリ島であることも考慮し、タマンロータリークラブの要請に応じることを内定した。

4. 年明け早々に、4クラブの会長・幹事会を開き、これ迄の経過を説明すると同時に計画への賛同を御願ひした。それ迄に「4クラブ合同(会員数約180名)でWCS事業を行う」という基本的な承認を得ていたこともあり、特別の反対もなく承諾を得た。

その後も地区WCS委員会と再三に亘り打ち合わせ、事業の具体的内容をつめ、「バリ島北部の山岳部にある9部落にコンクリート製水槽タンク(4m×4m×5m)を造る。我々4クラブは材料費を寄贈し、建設工事は地元民が行う」ことで合意が出来た。

そこで、4月13日、地区委員会を中継して、地元タマンロータリークラブ宛に、4クラブからの40万円と地区からの40万円を加え合計80万円の浄財を送金した。そして、「建設に早急に着手し、視察旅行迄に完成させてもらいたい」と要望した。

5. 5月12日、私達一行を乗せた日本航空JL715便は、未だ西の空が明るい17時35分、関西国際空港を飛び立ち一路インドネシア・バリ島に向って6時間半のフライトを開始した。「霧が深いので途中で揺れることが予想されます」とのアナウンスがあったが、たいしたこともなく定刻23時20分(日本時間24時20分)に、バリ・デンパサール国際空港に心地よい振動と共に機は到着した。空港には先行隊の人々が迎えに来てくれており、空港前に待機していた大型バスに乗り、宿泊先のホテル“ニッコウ・バリ”へ向った。さすが南国バリだけのことがあり、深夜というのにむしろ暑く、添乗員は汗を流しながら整理をしてくれていた。ホテルに着いたのは日付の変わった午前1時過ぎとなり、元気だった一行も睡気と長旅の疲れで口数も少なくなっていた。簡単な説明の後、割り当てられた客室に入ると冷房がきいており、先程までの不快感を忘れさせてくれた。スーツケースの整理もそこそこに、湯船に身を横たえたと一日の疲れも消えていくように思われた。

6. 翌日は1日中、自由行動日であったので、オプションツアーや買い物にと観光客気分の楽しい時間を送った。メインストリートに出ると、単車の多いのに驚いた。一台の単車に夫婦・親子が4人乗りをするという、日本では考えられない光景をよく見かけた。その単車がタクシーの間をうまく走り抜けて行くので、ヒヤッとすることが再三あった。よく事故が起きないものだと感心するが、やはり交通事故は多いらしい。

7. 旅行3日目は、今回旅行のメイン行程である“WCS事業”の視察日である。4チームに分かれて各施設を視察することになっているが、私達田辺クラブ一行は、4クラブ合同で寄贈した水槽タンクの贈呈式を行うために、バリ島北部の同島最高峰ワグン山(3170m)の中腹にある村の訪問である。車で片道4時間余り、悪路を走破するという最もハードなコースである。

その晩に地元ロータリークラブ主催の晩餐会が予定されており、遅くなることが出来ず、出発時間が30分繰り上がり午前7時30分となった。田辺クラブより参加した17名の内、体調不良の2名を残し15名・地区WCS委員で色々お世話いただいている豊沢さん(和歌山中RC)と旅行会社社長(堺フェニックスRC)を加えた17名がメンバーである。ホテル前に待機中の大型バスに乗り込み出発したが、途中からタマンロータリークラブの万亀子・イスカンダールさんと3400地区ガバナー補佐が乗り込み案内役をしてくれた。万亀子さんは、タマンロータリークラブ(16年前に、女性会員だけで創立)のチャーターメンバーで、今も同クラブを指揮する実力派会員である。九州の八女出身で、東京の大学に遊学中にインドネシアの公費留学生のご主人と知り合い、結婚をしたらしい。その後、夫の母国に渡り苦節したが、バリ島で観光・旅行業を始め、今ではタクシーやバス等の運送業にも手を広げている立身伝中の人物である。今回利用している大型バスも、彼女の会社の車輛である。万亀子さんは、添乗員の経験を生かして、通常では聞けない道中案内を熱心にしてくれた。①バリ島は愛媛県とほぼ同じ広さである。②人口は約350万人である。③観光客は1年間120万人位訪れるが、日本人は約35%である。④バリ島はヒンズー教が中心であるが、他の信者を排斥することはない。⑤350年間、東インドシナ会社(オランダ)の支配下で住民の教育は否定されてきた。スカルノが指導して1945年オランダから独立を果し、国語教育が始まったが学校制度は遅れている。⑥村部に入れば電気がきている所とそうでない所がある。住民は、朝明るくなれば起きて働き、夕方暗くなれば寝るので電気がなくとも不便を感じていない。⑦村より小さい集落(Du sunーズゥスン)が社会の基本単位である。一つの集落には80~120世帯が集まり共同生活をしている(これをバンジャルという)。⑧「バリではハエヤカが多く天然痘がこわい」と言うがそれは水が多い場所であって、これから行く集落では水がないから、ハエヤカも住めないからその心配はない。」等愉快地に説明してくれ、あきることがなかった。

8. 訪問地迄約150kmの距離があるが、その道中にドライブインがなくトイレ休憩が出来ない。一行の中に女性メンバーもおり立小便という訳にもいかない。バス会社では、ガソリンスタンドで給油して、トイレを借りることにしてくれていたらしいが、丁度1時間余り行った所に保健出張所(診療所)があり、トイレを利用させてもらうことになった。お世辞にもきれいといえない施設であったが、快く利用させてくれた好意に感謝し、そこの職員らと写真におさまる等触れ合うことが出来たが、これも旅のすばらしさかもしれない。

大型バスは、更に1時間ばかり段々畑を眼下に見ながら進んだが、突然道路脇の広場に停車した。「これから支線に入り大型バスが行けないので、小型車輛に乗り替えてほしい」といわれた。政府から借りてきたという三台の小型車輛に分乗して、未舗装の山間道に入ると腹にこたえる振動が続いた。道にはみ出している小枝をはち切りながら、車輛は走り続けた。山道はいくつにも分かれており、山懐に迷い込

んでしまって、帰れなくなるのではないかとすら思われた。アグン山は、今は休火山であるが、10年程前に大爆発があり熔岩が流れたそうだ。大きな黒い石が、所々に見えるのはそのなごりかもしれない。途中に川のような場所が見えるが、今は赤い土がむき出しになっている。バリ島では雨季と乾季が半年毎に繰り返しているが、今は乾季で流れがない。逆に、雨季にはここを大水が流れ、附近を荒らしてしまうのだろう。

しばらく進むと道路が行き止まりとなり、第1番目の訪問集落“Dukult(ドクウ)”に着いた。小さな粗末な掘立て小屋のような住居があり、数人の現地の人々が物めずらしそうに私達を迎えてくれた。正面にその附近とすれば少し大きめで立派な住まいがあり、貨物車と乗用車が1台ずつ目についた。万亀子さんの説明では、この集落の中で一番の金持で村長(首長)の家とのことである。地元の人案内で、細い道を少し歩くと裏の広場に集会場らしき建物があった。20~30人の屈強な男性がゴザを敷いて座っていた。彼らは均整の取れた体躯で、日本人が心配する肥満やメタボリック症候群とは無関係のようである。集会場の隣に、寄贈した水槽タンク(4m×4m×5m)がほぼ完成した状態で造られていたので、中をのぞいてみると予想より大きな槽であった。これならば相当量の水が貯えられ、住民の助けになると自画自賛した。水槽タンクの正面に、ロータリーマークと共に田辺ロータリークラブ外3クラブの名前が印字されていた。これを見て、一つの事業をやりとげた満足感がふつふつと沸き上がってきた。

村長にすすめられて、私達も集会場のゴザの上に、地元の人々と対面する形で座った。村長が、私達一同に対し、歓迎とお礼の言葉を述べた。その中で、「これで水くみが減ってうれしい。」と話した後、「教育問題にも頭を痛めていたが、頂戴したノート・鉛筆等おみやげの文房具類は皆で分けて使わせてもらいます。」と話したのは少々驚いた。失礼だが、自給自足の生活にあけくれ、教育問題にはそれ程関心がないと勝手に思っていた私は、いささかはずかしくなった。その後、訪問団を代表してあいさつをすることになった私は、「皆様が水問題と同時に教育問題にも苦悩されていることを知りました。日本へ帰ったらそのことを皆に話し、協力出来ることがないか検討します」とつい言ってしまった。

Dukult(ドクウ)村は、80世帯の人々が生活しているらしいが、住居状況からも、衣類の状況から見ても決して裕福とは思われない。電気も入っていないようで、いわゆる文化的な生活から程遠いように思われた。しかし、住民の顔には、何の不足も不満も感じられずおおらかであった。多くのプレッシャーを感じつつ生きている我々より、彼らの方が、精神的には自由で恵まれた生活を営んでいるのかもしれない。ココナッツの実をナタで割って接待してくれ、小さなナイロン袋に入ったカシオナッツ等の産物様のおみやげをくれた。彼らの素朴であるが、心のこもった歓迎が本当にうれしかった。村長が一声掛けたところ、何処に居たのか分からないが子供達が大勢舞台に入ってきたが、その大きな目が印象的だった。みやげに持っていった文房具や折り紙をうれしそうに受け取り、何度も頭を下げていた姿がまぶたの裏に焼きついている。遠路はるかな訪問であったが、行ってよかったと思った。

9. 次に、車で30分程細い山道を走り、一谷越えてSukadane(スカダナ)村を訪問した。この村は125世帯の人々が生活しているとのことであるが、多くの人々が村の広場で歓迎してくれた。その中から一人の盲目の男性が、静かな心にしみる笛の音を聴かせてくれた。彼は、インドネシア国内の大会で優勝

した笛の名手であるらしいが、何の楽器でも上手に演奏出来るとのことである。身なりは粗末であるが、その態度には気品と自信があふれていた。

一人の女性が奇声をあげて走り回っていたが、集団の人々は特に気にすることもなく、にこにこ見ていただけである。ここらにも、この地に住む人々のおおらかさと共同社会の家族意識があるように感じた。Sukadane(スカダナ)村にも、前の村と同じく寄贈した水槽タンクが完成し、水槽の中央にロータリーマークと共に「田辺・田辺東・田辺はまゆう・白浜クラブ・・・ジャパン」のローマ字が鮮やかに刻されていた。私達はもう一度この地を訪問することはないかもしれないが、水槽タンクと共に4クラブの名前は長く長く残されるだろう。そしてこの水槽タンクは、住民の生活の大きな助けになることだけは間違いない。

10. この他の部落でも、私達の訪問を心待ちにしてくれていたようであるが、時間の関係で行けず残念であった。

今回の旅は、国境を越えたロータリーの社会奉仕活動=WCSの意義を、私らに再確認させてくれた貴重な体験であった。

(RI第2640地区マンスリーレター・2007年月6号より)